

池田大作の『人間主義外交』

—1974年訪中・訪ソを事例として—

寺西宏友

はじめに

2009年9月8日、創立者の池田大作は、翌年の恩師戸田城聖生誕110周年の開幕を記念し、「核兵器廃絶へ 民衆の大連帯を」と題する提言を発表した。池田の足跡を追うと、この9月8日という日を選んで、今回の提言発表以外にも重要な事績が多く見受けられる。これは、恩師・戸田城聖が死去の前年1958年に遺訓として「原水爆禁止宣言」を発表した日に寄せて、という池田の明確な意図の表れと思われる。すなわち、恩師の遺訓を妄語とさせないという池田の強い決意の表明でもある。その意味で、池田の人生の足跡は、まさに恩師の遺訓実現そのものでもあったと言える。

こうした恩師の遺訓を実現しようとする、平和実現のための活動を振り返ると、初訪中・初訪ソが行われた1974年を嚆矢として、以後、国際社会での活動が積極的に展開されている。その意味で、1974年というのは、池田の平和実現のための活動の中で、大きな転換点であったといえる。本稿においては、初訪中・訪ソが行われた1974年の意義に着目し、またその訪中・訪ソを事例として、その行動の背景と、意図を検証する中で、池田の『人間主義外交』について考察する⁽¹⁾。

1. 池田の初期の海外渡航

まず、池田の創価学会会長就任以降の海外での活動について、概観してみたい。1960年に在家仏教団体である創価学会の第3代会長に当時まだ32歳という若さで就任している。その会長就任の同じ年に、池田は世界への第一歩を踏み出し、北南米9都市を訪問し、各地の創価学会メンバーを掌握・激励をしている。以来、1967年まで、合計13度の海外渡航をしているが、これらは、基本的に創価学会の海外組織の構築・整備をその主な目的としてのものであった。(表1参照)

また、この間の池田の行動記録を見ると、かなり頻繁に海外ジャーナリストや、在京大使館関係者との会見が確認される。これらは、急速に発展する創価学会、特に公明党という政党の結成に関して、そのリーダーに目指す目的を問うという形で、行われたものであった。1967年と70年に行われた、ヨーロッパ統合の父とも言われるクーデンホーフ・カレルギー伯爵との対談は、それ

⁽¹⁾ 本稿は、2009年5月に英国クイーンズ大学と共催で行われたシンポジウムにおける発表を、加筆・訂正したものである。

らのインタビューとは異なり、東西文明を対比し、世界の進むべき方途を論じ合ったもので、池田の海外識者との初の本格的対談であったと言える。

1974年が、池田の平和行動の軌跡における転換点と述べたが、その転換を促す契機が、1972年・73年の世界的歴史学者A・トインビー博士との対談であった。まず、そのトインビー博士との対談から見ていく事とする。

表 1 池田の海外渡航記録 (1960—1967年)⁽²⁾

No.	期間	訪問地
1	1960. 10. 2—10. 25	U. S. A, Brazil (9 Cities)
2	1961. 1. 28— 2. 14	Honkong, India, Burma, Thailand, Srilanca, Cambodia
3	1961. 10. 4—10. 23	Europe (9 Countries)
4	1962. 1. 29— 2. 12	Iran, Iraqu, Turkey, Greece, Egypt, Pakistan
5	1963. 1. 8— 1. 27	U. S. A., Europe (6Countries), Levanon, India, Honkong
6	1964. 5. 12— 5. 24	Australia, India, Srilanca
7	1964. 10. 2—10. 19	Honkong, Iran, Europe (7Countries)
8	1965. 8. 14— 8. 25	U. S. A., Mexico
9	1965. 10. 19—10. 31	France, West Germany, Italy, Portugal
10	1966. 1. 13— 1. 17	U. S. A.
11	1966. 3. 6— 3. 23	U. S. A., Brazil, Peru
12	1966. 8. 20— 8. 22	U. S. A
13	1967. 5. 13— 5. 29	U. S. A., France, Italy, Switzerland, Nederland

2. トインビー博士との対談

1) 対談申し入れの経緯と背景

1968年から71年にかけて、池田の海外への渡航はなかった。この時期は、まさに池田の畢生の事業とも言うべき、創価学園（1968年）ならびに、創価大学（1971年）の創価教育の諸機関創設が相次いだ時期で、池田のかなりの精力がこうした教育機関の創設準備に注がれていたものと思われる。その間に、トインビー博士からの対談を申し入れる書簡が、池田の手元に届けられた。1969年の秋に届いたその手紙には、以下のように対談の申し入れが綴られていた。

「私が最後に、日本に滞在しておりました1967年当時、創価学会ならびに貴殿について、話を伺いました。(中略) 貴殿の思想や著作に強い関心をもっております。それで、もしよろしければ、貴殿を英国にご招待し、現在、人類が直面している諸問題に関して、二人で有意義に意見交換出来れば幸いです。」⁽³⁾

⁽²⁾ 『年譜池田大作』（第三文明社、1981年）を参照し作成。

⁽³⁾ 池田大作『新・人間革命』第16巻 聖教新聞、2006年、132—134頁。

その後も、いくたびかにわたってトインビー博士から対談の希望が伝えられ、そして1972年の5月5日、ついに両者の対談が実現した。トインビー博士、83歳、池田、44歳。対談は、翌1973年とあわせて、のべ10日間、約40時間にわたった。そこでは、人類が直面する重要問題について、ありとあらゆる観点から対談が繰り広げられている。

博士が、池田との対談を希望した理由としては、文明史家としての博士が、人類の未来をリードする思想として、大乘仏教思想に大きな期待を寄せていて、それとの文明的対話を望んでいたことが挙げられる。これは、1967年に来日したトインビー博士自身が、そうした思想を代表できる人物との対話を望んでいたことから明らかである⁽⁴⁾。また、大乘仏教思想を代表する人物として、当時40代の池田を対談相手として望んだことについては、その大乘仏教思想に対する知識量というよりも、仏教思想を現代社会に展開する実践力に期待するところが大きかったと思われる。博士の「図説・歴史の研究」の翻訳に携わった桑原武夫（京都大学名誉教授）は、1967年当時来日したトインビー博士とも対談をしているが、後日次のように述懐している。

「政治権力によって教団が骨抜きにされた日本とは異なり、宗教が政治権力と拮抗しうる力をもった西欧の知識人は、創価学会にたいして、日本の知識人とは比較にならぬほど強い興味をもっている。トインビーもその一人である。」⁽⁵⁾

両者の対談を読むときに、強く感じるのは、トインビー博士の現代社会に対する危機感の深さと、それをもたらした思想背景としてのキリスト教文明に対する批判的態度ならびに、大乘仏教思想に対する探究心の旺盛さである。博士は、かなり以前から、大乘仏教思想に関して、研究しており、理解も深めていたと推測される。事実、この対談の中には、博士が、大乘仏教について、このように理解してよいか、という確認を池田に求める箇所が多く見られる。博士は、自身で探求を重ねた大乘仏教の理解を確認する相手として、理論家と言うよりは、実践者としての背景を持つ、池田を選んだのであろうと思う。いずれにしても、両者が2年越しで約10日間、語り合った対談をもとに、1974年に「21世紀への対話」と題する本が、出版された。この本の序文に、トインビー博士は、次のように記している。

「池田大作がそうあるべきと考えるよりも、人類史の次の段階がより暴力的かつ野蛮なものになるのではないかとアーノルド・トインビーが恐れるもう一つの理由は、たぶん二人が生まれ育った宗教的土壌の違いにあると思われる。アーノルド・トインビーはキリスト教徒として生まれ育った。池田大作は大乘仏教の信奉者である。仏教もキリスト教もともに広い地域——これまでに広まったいかなる宗教制度の場合よりも広い地域——に普及した。しかし、両宗教の流布にさいしてとられた手段、およびその与えた影響には違いがあった。仏教は、ほとんど平和的伝播によってのみ広まっていった。しかもその流布地域にあつては、土着の既存宗教、既存哲学と出会ったさいにも、なんらためらうことなく、それらの宗教、哲学と平和裏に並存してきた。（中略）しかしながら、両著者におけるそうした宗教的、文化的背景の違いにもかかわらず、二人の間で

⁽⁴⁾ 角山栄「21世紀文明の『衝突』か『共生』か」（『週刊読書人』2003年7月26日号5面所収）参照。

⁽⁵⁾ 桑原武夫「実践者の対話」（池田・A・マルロー『人間革命と人間の条件』潮出版、1976年に序文として収録）

交わされた対話には、それぞれの人生観、目的観に、多くの合致点が見られるのはむしろ驚くべきことである。」⁽⁶⁾

この一節からも、トインビー博士が、平和な人類社会をもたらすために、どれほどの期待を大乘仏教思想にかけていたかは明らかであろう。

2) 対談のインパクト

1973年5月19日対談最終日の朝に、ソ連（当時）のブレジネフ書記長が西ドイツ（当時）を訪問し、ブランド首相との歴史的会見を伝えるニュースを聞き、トインビー博士は、「政治家同士の対談に比べ、私たちの対談は地味かもしれませんが、しかし、私たちの語らひは、後世の人類のためのものです。このような対話こそが、永遠の平和の道をつくるのです」と言った。さらに対談の終了後には、トインビー博士が、池田に今後ともこうした対談を継続して言ってほしいと望み、対談相手として数名の名前を書いたメモを渡している⁽⁷⁾。

トインビー博士からの平和のバトンを託された池田は、その後、フランスの作家アンドレ・マルローや、ローマクラブ会長アウレリオ・ペッチェイ、世界的な美術史家ルネ・ユイグら、世界の名立たる識者と相次いで対談を展開している。以来、池田は、実に2000回にも及ぶ対談を続け、対談者には、中国の周恩来総理やソ連のゴルバチョフ大統領、南アフリカのマンデラ大統領、アメリカのキッシンジャー博士など、数多くの世界の指導者が含まれている。またその対談は、アジア、ヨーロッパ、北米、中南米、アフリカ、さらにはイスラム圏と、文明を超えた対話でもあった。これらの平和実現のための対談は、池田とトインビー博士との対談集である「21世紀への対話」が世界に与えた波動であるともいえる。

こうした一連のことに鑑みる時、この対談が池田にとって、恩師・戸田先生の平和思想を原点に、世界平和の実現に向けた具体的な行動を大きく展開していく重要な転機となっているものと推察される。

その顕著な行動が繰り広げられたのが、1974年から75年にかけてであった。この時期に、池田は、1月に香港、3月から4月にかけて北中南米、5月29日から6月16日まで初の訪中、9月8日から18日まで初の訪ソ、12月2日から6日まで中国、翌75年1月にはアメリカ、4月には第3次訪中、5月には英・仏・ソ連と、実に席の暖まる暇もなく、世界を駆け巡っている。(表2参照)そして、その行動の中には、創価学会会長としての会内諸行事参加や会員激励等に加え、諸大学の訪問・講演や、各国の要人との会見という対国際社会に対する積極的な活動が含まれるようになった。以下、その内の訪中と訪ソに焦点を当てることとする。

⁽⁶⁾ アーノルド・J・トインビー・池田大作『21世紀への対話』上、聖教ワイド文庫、2007年、6－7頁。

⁽⁷⁾ 池田大作『新・人間革命』第16巻、218頁。

表2 池田の海外渡航記録 (1974-1975年)⁽⁸⁾

No.	期間	訪問地
1	1974. 1. 26- 1. 31	Hong Kong
2	1974. 3. 7- 4. 13	U. S. A. , Peru, Panama
3	1974, 5. 29- 6. 16	China
4	1974. 9. 8- 9. 18	Soviet Union
5	1974. 12. 2-12. 6	China
6	1975. 1. 6- 1. 28	U. S. A.
7	1975. 4. 14- 4. 22	China
8	1975. 5. 13- 5. 30	France, U. K. , Soviet Union

3. 中国初訪問の背景と意義

1) 訪中に至る経緯

中国に関して言えば、1968年に池田が、日中の国交正常化と、中国の国際社会での正当な地位、つまり国連への代表権を訴えた提言は大変に有名である⁽⁹⁾。これは、当時7億を超える人口を抱える中国との関係を正常化することなく、アジアおよび世界の平和はあり得ないとの全体観・歴史観に立つ池田の信条を表現したものであった。池田は、1964年に公明党結党のおりにも、中国との関係正常化をその政治課題として、党の綱領に謳うことを望んだ。当時の日本は、台湾を唯一の中国を代表する国家として認めるアメリカの方針に追随していたため、この提言を評して、中国に対してひどく誤った期待を高めさせるもので、日本政府の外交の障害になるとの見解を、外務省幹部が、アメリカの駐日大使、在日米軍司令官等との協議の席上で語っていたことが、後年明らかになっている⁽¹⁰⁾。また、この提言の後、多くの右翼が、池田を街頭宣伝等で、攻撃もした。そうした状況の中での勇氣ある行動を、周恩来総理はじめ、中国の首脳は高く評価していた。中国から訪問の要請を受けていた池田は、国交正常化については、政治の仕事との考えから、自身の創設した公明党に、日中国交正常化へ向けての橋渡しの役割を果たすように要請した。公明党代表団の数次に及ぶ訪中と、周恩来総理との国交正常化のための条件整理のための事前の交渉を基礎として、最終的には1972年9月に田中首相の訪中によって、国交正常化は実現された。

そして、池田自身の訪中は、1974年5月に実現を見た。この訪中の直前には、東京で、陳楚駐日中国大使ならびにトロヤノフ駐日ソ連大使と相次いで会談し、目前の訪中ならびに秋に予定される訪ソについて打ち合わせを行っている。このことは、通説で、訪中をして中ソの対立に不安を抱く中国民衆に接する中で、相次いで訪ソを決意したと言われることがあるが、そうではな

⁽⁸⁾ 『年譜池田大作』(第三文明社、1981年)を参照し作成。

⁽⁹⁾ 南開大学周恩来研究センター 王永祥 編『周恩来と池田大作』、朝日ソノラマ、2002年、30-45頁。提言の概要と同時にこの提言に対する各方面からの評価がコンパクトにまとめられている。

⁽¹⁰⁾ 蔡徳麟「歴史的豊碑」『深圳大学学报』、1998年、第4期(前掲書41頁から再引用)。

く、池田が、中国に続きソ連をも訪問しようと計画していたことの証左と言える⁽¹¹⁾。こうした両国を相次いで訪問するという行動を決意した背景には、緊張の度合いを深める中ソ対立に対しての強い危機感があつたと推測される。1956年以降、路線対立を契機に深刻化する中ソの対立は、1974年3月にも、中国は領内に侵入したソ連のヘリコプター乗組員を逮捕し、スパイ行為であると強く非難する事件が起こっており、いつ戦争に発展してもおかしくないほどの状況にあつた⁽¹²⁾。池田は、特に1964年に中国が核実験に成功し、核兵器保有国となっていたことから、両国の戦争は核兵器使用につながる当時の世界では最も危険性を孕んだものと認識していたのである。

2) 第1次訪中

1974年5月30日池田一行の訪中団は、香港から深圳へ徒歩で国境を超え、17日間に及ぶ第一次訪中の第一歩を記した。北京・西安・鄭州・上海・杭州・広州の6都市を巡り、北京大学訪問や、李先念副首相との会見をはじめ、学校や様々な生産現場の視察等、あらゆる階層の中国人民との交流を繰り広げた。この訪中の際には、周恩来首相は、手術の直後で、会見することはなかったが、池田一行の細かな言動が、すべて伝えられていたという⁽¹³⁾。

この訪中で特筆すべきことは、3点ある。1つは、池田が積極的に、あらゆる階層の中国人民との友好交流に臨んだことである。このことは、北京市労働人民文化宮での児童祭（「六一」児童デー）の折に、エスコートした少女に「おじさんは何をしに中国へ来たのですか？」と問われた際に、「あなたに会うために来ました」と語った言葉に象徴される。2つ目は、旅行中同行していた中日友好協会幹部ならびに政府要人との話し合いの中で、中国の核問題・世界平和へ向けての外交政策のあり方等に関しての自身の見解を率直に表明していたことである。3つ目は、北京の中学校および、北京市街でのソ連の攻撃に備えた防空壕建設の実際を具（つぶさ）に観察し、あらためて中ソ間の緊張緩和の必要性を確認したことであった。

北京での最終日には、2時間15分にも及んだ李先念副首相との会見が行われ、中国の核兵器先制不使用、平和5原則堅持の言明を聞き出している。

池田は、このハードスケジュールな旅行の最中にも、中国での見聞を原稿として執筆をし、帰国直後の多忙なスケジュールの中、7月から8月にかけて、日本の主要な週刊誌・月刊誌等に発表をした。それらは1冊にまとめられ、同年12月に毎日新聞社から『中国の人間革命』と題して発刊されている。

⁽¹¹⁾ 74年の訪中・訪ソについては、その前年、すなわちトインビー博士との対談終了後に準備が開始されると思われる。当時池田の秘書をされていた方の記憶によれば、73年7月くらいに、中国およびソ連訪問準備のために、それぞれにチームが結成され、準備が開始されたとの話が残っている。この点については、後世のためにも詳しく確認をしていく必要があると思われる。

⁽¹²⁾ 文末の「表3中ソ紛争関連略年表」を参照。（国際ジャーナリスト会議編『事件・できごとクロニクル』ぎょうせい出版 を参照し作成）

⁽¹³⁾ 南開大学周恩来研究センター 王永祥 編『周恩来と池田大作』、75頁。

4. ソ連初訪問の背景と意義

1) ソ連初訪問にいたる経緯

訪ソの前年、1973年秋に、市民レベルでの日ソの交流窓口の一つである「日本対外文化協会」を通じて、ソ連サイドから、池田に訪ソの意向があるかどうかの打診があった。「日ソの文化交流を促進し、恒久平和を築く一助を担うために、機会があれば訪ソ」する意志がある旨の回答をすると、ソ連科学アカデミーの会員であるナロチニスキー博士とキム博士という二人の歴史学者が、12月に「日ソ歴史学シンポジウム」で来日する折に、創価大学を訪問し、池田と会いたいとの要請が寄せられた⁽¹⁴⁾。この二人の訪問に際しては、当時1期生から3期生までの創価大学の学生が真心からの歓迎をした。池田自らも、二人と会談をし、日ソ間の交流促進のために、(仮称)「日ソ学生文化交流協会」の設置や、モスクワ大学に「東洋哲学」に関する科目の新設等の、具体的な4つの提案をしている。この二人は帰国後、この創価大学訪問の模様を詳細に報告し、それがモスクワ大学による、池田の招聘決定へと繋がっていったのである。

1974年の9月に池田は、創価大学の代表団とともに初めてソ連を訪問した。この訪ソのニュースが流れると、宗教団体の指導者が、共産主義の国へ一体何をしに行くのか、との論調が強くなった。当時筆者自身、創価大学の1年生だったが、創立者の訪ソに反対する右翼系の学生団体が、深夜にキャンパス内に侵入し、反対のビラを撒いていったことを鮮明に記憶している。おそらくこうした考えは、日本社会もさることながら、迎えたソ連サイドにもあったと思われる。池田を招聘するに際してのソ連サイドでの議論の経過を、当時ソ日協会の副会長で、ソ連共産党中央委員会国際部で日本を担当していたI・I・コワレンコが、後年述懐している記録が残っている。それによれば、共産党中央委員会では、もう少し創価学会ならびに公明党について調査・検討を加えてから招聘を決定しようという、時期尚早論が強かった中で、コワレンコ自身が、断固国家レベルでの招聘を主張し、最終的にはコスイギン首相が支持して決定をみたとなっている⁽¹⁵⁾。

2) トローピン副総長の回顧録によるコスイギン会見

当時、池田を迎えたモスクワ大学では、トローピン副総長が、受け入れの中心的存在で、殆どの行事に同行していた。そして、池田のソ連での行動を振り返って、「出逢いの20年」という回顧録を1995年に出版している。そこには、ソ連での池田と様々な人々との出会いが、克明に描かれている。中でも、訪問最終日にクレムリンで会見をしたコスイギン首相とのやり取りは、大変に興味深い。トローピン副総長によれば、コスイギン首相というのは、どんなことにも幻影を抱くような人物ではなく、池田との出会いにしても、何か収穫があるなどとは期待もしていなかったし、型どおりの歓迎の挨拶が済めば、数分で会見切り上げのサインが、首相から出るだろうと思っていた。しかし、実際には、予定の時間を超えて「人間味溢れる会話が」繰り返された。日本人と会えば、北方領土返還のことしか言わず、日ソの関係改善など望むべくも無いと思っていた、コスイギン首相に対して、池田は、ロシア文学・民謡・バレエ・音楽に対する自身ならびに

⁽¹⁴⁾ 池田大作『新・人間革命』第20巻、聖教新聞社、2009年、157-162頁。

⁽¹⁵⁾ 中澤孝之『ゴルバチョフと池田大作』、角川書店、2004年、76-78頁。

日本人の敬愛の念を、そしてコスイギンの故郷レニングラード訪問の印象とファシズムとの戦いの歴史を通じての、不戦への願望を真摯に語られた。訪中の折に、李先念副首相から託されたメッセージ、自身が見聞した、平和を求める中国人民の思いも伝え、そのために、両国間の教育・文化交流を促進し、両国国民の相互理解を深めるべきだとの信条を訴えた。そして、話題が軍備に及んだとき、コスイギン首相は、「今や一瞬にして全人類を絶滅させてしまえるほどの武器が作られてしまった、世界が生き残れる保証はない」としみじみと語った。これは、「ソ連の核兵器の存在こそが、世界平和の保証であると言う従来の論理」を真っ向から否定する話である。最終的に、コスイギンは、核兵器で世界を脅威に陥れるようなことになっては断じてならないし、ソ連自身がそうなることは絶対に無い、特に対立が懸念されていた中国に対しても、攻撃をしたり、国際社会の中で中国を孤立させたりするようなことは絶対にしないと、言明をしたのであった。一民間人である池田を相手に、全く予想外の会見となったことに、居並ぶ同席者は、大変に驚いたと綴られている⁽¹⁶⁾。

3) 「私のソビエト紀行」

この訪ソの中でも、池田は、庶民ならびに各界の代表者との語らいを積極的に展開し、その率直な印象を、訪中の折と同様に、原稿として執筆をし、帰国後発表し、翌75年2月に「私のソビエト紀行」として発刊している。中国にしてもソ連にしても、当時の日本の民衆にとっては、体制の違いという厚い壁に阻まれ、そこに生きる民衆の真の姿を、知る由もなかった。池田は、中国・ソ連歴訪の中で接した人々の平和を希求するさりげない一言を伝えることによって、自分たちと何ら変わることのない、庶民の生活の息づかいを描き出している。それは、民衆相互の理解を欠いては、平和構築はあり得ないという信念の表明でもあった。

5. 第2次訪中と周恩来との出会い

1974年12月、北京大学からの招聘による2度目の訪中の折に、池田は、鄧小平副首相と会見をし、コスイギンのメッセージを伝えている。その直後の深夜に、病気で入院中の周恩来総理は、周囲の反対を押して、池田と会見をした⁽¹⁷⁾。その折に周恩来は、池田の日中国交正常化に果たした貢献に感謝するとともに、「あなたは若い。これからも中日友好を頼みます」と語っている。

病をおして「どうしても会わなければならない」と望んだ、周恩来総理の信義の厚さに、池田は、一貫して日中友好の重要性を訴え続けて、応えて来ている。訪中も11度を数え、周恩来以降の歴代の指導者との友好交流も現在に至るまで続いている。また池田は、中ソの緊張緩和のために民間人として、両国の首脳との率直な対話を続け、相互の信頼醸成と直接対話のためにありとあらゆる努力を続けた。両国をその後も訪問し続けたことはもとより、自身が作った創価大学や民主音楽協会を通じた教育・文化交流も多面的に繰り広げた。

⁽¹⁶⁾ ウラジミール・トローピン『出逢いの二十年』、潮出版社、1995年、66-84頁。

⁽¹⁷⁾ 南開大学周恩来研究センター 王永祥 編『周恩来と池田大作』、87-102頁。74年12月の第2次訪中の詳細についても、同書の中に詳述されている。

中ソ間の関係は、75年以降、一朝一夕に改善することはなかったものの、深刻な武力対立に発展することはなく、82年以降徐々に両国の歩み寄りが開始され、最終的に89年5月ゴルバチョフが中国を訪問し、鄧小平と会談し、関係正常化を宣言するにいたったのである。

6. 75年の訪米とSGI結成

1975年の1月には、アメリカを訪問し、当時のワルトハイム国連事務総長や、合衆国国務長官であったキッシンジャー博士とも会談をし、中ソを駆けめぐり中での両国首脳との会談の内容も伝えている。そしてアメリカ訪問の最後には、グアム島において、SGI（創価学会インターナショナル）の結成のための「第1回平和会議」が、世界51カ国の代表が参加して開催された。

席上、池田はトインビー博士との対談で語り合った人類世界の展望と、現代世界における戦争の危機について語り、核戦争の脅威・環境問題・南北問題等の諸問題に言及した。そうしたトランスナショナルな問題に立ち向かうための、国益や民族益を越えた連帯を目指すのがSGIであると宣言したのである。

池田は1960年に会長に就任して以来、世界各地の会員を励まし、まさに自らの手作りで、育て上げた各国の組織の代表者を前にして、最後には次のように呼びかけた。

「皆さん方は、どうか、自分自身が花を咲かせようと言う気持ちではなくして、全世界に妙法と言う平和の種をまいてその尊い一生を終わってください。私もそうします。」

「それぞれの国のために、尊き人間のために、民衆のために、この一生を晴れ晴れと送ってください」⁽¹⁸⁾

この発言は大変に平易ではあるが、池田の世界平和にかける信念を端的に言い表していると思う。

7. 池田の「人間主義外交」

以上の考察をもとに、池田の展開した民間外交を、「人間主義外交」と呼びたいと思う。そしてそれを総括すると以下の2点に要約されよう。

まず、第1に、世界の平和に向けた国と国との外交にあっては、人間の存在を強く意識すべきであると言うのが、池田の考える「人間主義外交」の基本であろうと考える。すなわち、各国を代表する首脳は、国家や体制の利害を体現する機能と言う側面を持つと同時に、血の通った人間でもあり続けるとの認識を忘れてはならないということである。池田が中国・ソ連の首脳との会見の中で、実践したのは、一個の人間同士として胸襟を開いた率直な対話であった。いかなる利害対立を抱える国同士であっても、その代表者が、まず人間的な信頼を築く努力をし合えば、問題解決の糸口は見いだせるとの信念の実践であった。その認識のもと、池田は、ありとあらゆる機会に、国家の首脳が直接会って率直に意見交換することの重要性を主張し続けている。

また第2として、池田は、国家の意志を決定する上で、国民・民衆の世論が、大きく影響する

⁽¹⁸⁾ 池田大作『新・人間革命』第21巻、聖教新聞社、2009年、「SGI」の章。

事から、民衆レベルでの広範な相互理解促進の重要性を強調してもいる。池田自身が、多忙なスケジュールの中で、執筆活動を続け、国・体制を越えた民衆の真の姿を伝える努力を続けてきたのはその為である。民衆相互の理解の裾野を広げる努力として、池田自身が創設した創価教育機関・民主音楽協会・東京富士美術館等が窓口となった教育・文化交流を通じて、人の往来を促し続けてもいる。

最後に、池田の行動の特徴は、何よりもSGI運動を通じて世界の各地で、想いを共有する人々の連帯の輪を広げる努力を続けていることにあると思う。前述のソ連共産党コワレンコは、自著の中で池田を評して、「優れた社会活動家、宗教家、現代の大哲学者」「民間外交の名人」と称賛している⁽¹⁹⁾。コワレンコの指摘によれば、世界の平和を希求し、様々な理念・提言を世に問う識者が多くいる中で、池田の特筆すべき長所は、その発言には、常に連帯の輪を広げようとするものにじむが如き努力の裏づけがあることである。

考察の最後として、池田の展開した「人間主義外交」の「人間主義」とは、1に「人間存在」の本質に迫る透徹した洞察と、2に国益や民族益を超えた「人類益」の実現に徹しぬく揺るがぬ信念・行動という2つの側面から理解されるべきことを強調しておきたい。

表3 中ソ紛争関連略年表

1950年代後半	フルシチョフ首相によるスターリン批判以降、両国の路線対立が先鋭化し、関係悪化
1960年代末	政治路線を巡る対立に加え、領土紛争による緊張が高まる。4,380kmに及ぶ国境線をはさんで、ソ連軍658,000人、中国人民軍814,000人の部隊が対峙。
1969年3月2日	極東ウスリー川の中州・ダマンスキー島（珍宝島）での軍事衝突。ソ連側80人の死傷者、中国側死者800人の記録が残っている。
1969年7月8日	黒竜江（アムール川）の八岔島（ゴルジンスキー島）で武力衝突。8月にはウイグルで衝突。極東及び中央アジアでの更なる交戦の後、両軍は最悪の事態に備え、核兵器使用の準備を開始。
1969年9月	北ヴェトナムのホー・チ・ミン国家主席死去に伴い、コスイギン首相が、葬儀列席の帰途北京に立ち寄り、周恩来首相と会談。政治的解決の道を探ることで合意し、軍事的緊張は緩和されたものの、国境問題の解決は先延ばしされ、両国とも国境への兵力配置は継続。
1970年代	国境画定の協議や交渉は続けられたものの、有効な成果は見られなかった。

⁽¹⁹⁾ イワン・コワレンコ（加藤昭監修、清田彰訳）『対日工作の回想』、文芸春秋、1996年、241—243頁。